

選評

柿沼万里江

パウル・クレーの両面作品について

パウル・クレーはしばしば、紙の表と裏の両面に絵を描いていた。そこには何か意味の連関性があるのだろうか。画家はどこまでそれを意図したのだろうか。しかも、支持体としての紙が透ける場合もあれば、透けない場合もある。同じ「両面作品」でも、これら両者において、いかなる違いがあるのだろうか。本論文は、これまで本格的に論じられることのなかった、これらクレーの「両面作品」をめぐる興味深い問題に、新たな解釈の光を当てようとする意欲的な試みであり、ベルンのパウル・クレー・アーカイヴを中心に綿密な現地調査を踏まえたその成果は、高く評価される。

透ける支持体の作例の分析に当たって著者は、図像学的・意味論的な方法を、他方、透けない支持体の作例の分析の場合には、制作論的・受容論的な方法を取り入れている。このアプローチの違いは、対象の性格を際立たせるために、自覚的に選択されたものであると理解される。この点からも著者が、美術史のさまざまな方法論を念頭に置いたうえで、クレーの両面作品の多義的で多機能的な特徴を究明しようとしている姿勢が読み取れる。

こうして、特に後者の作例においては、モチーフのストック機能や再提示、再発見といった制作動機が明らかにされる。本論文では、それぞれ一例ずつが取り上げられているに過ぎないが、著者も述べるように、550点もの「両面作品」があるとすれば、それらの包括的な研究については、今後の調査・分析が俟たれることになるだろう。画面の表と裏との開かれた相互作用のさらなる研究によって、「作品はつねに生成していく」というクレー芸術の真髓が、まったく新しい観点から明らかにされることをさらに期待したい。本論文は、その豊かな可能性を秘めたものである。ここに、本論文に『美術史』論文賞を授与する所以である。